

# *Great Expectations*

— Joe Gargery による罪の赦し —

吉田 一穂

## 1. *David Copperfield* との相違点

*Great Expectations* (1861) は、しばしば、*David Copperfield* (1850) との共通点を指摘される。両作品が比較される理由として、両作品とも教養小説のはんちゅうに入ると考えられているだけでなく、ポール・デイヴィス(Paul Davis)が述べているように<sup>1)</sup>、両作品ともディケンズの自伝的側面を反映し、主人公である2人の少年が本質的に孤児であるという理由が挙げられる。さらに、ポール・シュリック(Paul Schlicke)が説明するように<sup>2)</sup>、両作品とも一人称の回顧的物語であり、主人公の田舎と都市の間の移動が見られ、愛における変遷、若者の希望、夢を扱い、少年から成年への成長をたどっているという共通点がある。

ディケンズは、*David Copperfield* を再び読み、無意識的繰り返しがないように努めたが、*Great Expectations* には、ディケンズがフォースター(Forster)宛ての手紙(1860年10月上旬)の中で認めるように、明らかに *David Copperfield* の繰り返しが見られる<sup>3)</sup>。このことから、ディケンズが、*David Copperfield* を読み返すことにより自らの思惑とは逆に影響されてしまった可能性が考えられる。語り的手法として、ディケンズは *Great Expectations* において *David Copperfield* の場合と同じように二つの視点を用いている。すなわち、語り手としてのピップの視点と全知者(the Omniscient)たる作者の視点である。この二つの視点を用いることにより、ディケンズは読者にピップへの共感を持たせたり、客観的にピップをながめさせたりさせるだけでなく、読者に時間意識を持たせるという効果をあげている。このことは、*David Copperfield* においてデイヴィッドが自身のことを語るにあたり、時間とともに移り変わる自身の感情を語る一方、現在から過去を語ることにより、その時々状況を客観的に述べるのと同様である。

このように多くの共通点があり、影響関係が感じ取れる両作品ではあるが、*Great Expectations* と *David Copperfield* には相違点もある。ピップ(Pip)の物語は、デイヴィッド(David)の物語よりも構成上緻密であるだけでなく、より内面的である<sup>4)</sup>。また、両作品をヒーローの人生という観点から考えると、作家が *David Copperfield* において、自助努力によりデイヴィッドが作家としての成功へと至る過程を描いているのに対し、*Great Expectations* においては、ピップの希望と幻滅、そして自らの欠点に気づく過程を描いている点において異なっている。さらに、回顧的物語において、両作品のヒーローは自らの過去の過ちを認めるが、*David Copperfield* においてデイヴィッドが感じる過ち一例えば、

メル(Mell)先生がステアフォース(Steerforth)の不興によって学校を辞めなければならなくなることに関して、自分がステアフォースの行動に対してなにもできなかったことに自責の念を感じることや、アグニス(Agnes)を最初から人生の伴侶として選ばず、ドーラ(Dora)を選んでしまったことは、デイヴィッドのステアフォースに対する友情から裏切れないという気持ちや、ドーラに一時的とは言え真剣な愛情を感じたことから、彼の罪の意識とは結びつけては考えられない一方、*Great Expectations*においてピップの感じる過ちすなわちジョーを自身の紳士への夢のため裏切ったことは、彼の罪の意識と密接に結びついているという点で異なっている。ピップの罪の意識は *Great Expectations* において重要な意味を持ち、作品の始めから終わりまで作品を支配しているように思われる。この罪の意識からピップを解放する人物がジョー・ガージャリ(Joe Gargery)であるが、彼はキリスト教における罪の赦しと深い関係にある人物である。本論文では、ピップの罪の意識を考察することにより、ジョー・ガージャリの罪の赦しの意味を考察したい。

## 2. 楽園の喪失

ピップの子供時代の罪の意識は、キリスト教における「原罪」<sup>5)</sup>と深い関連性を持っているが、ピップの子供時代を考えるにあたり、ロマン派の詩人の子供観が参考になる。ウィリアム・ブレイク(William Blake, 1757-1827)、ウィリアム・ワーズワース(William Wordsworth, 1770-1850)、サミュエル・テイラー・コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)、ロバート・サウジー(Robert Southey, 1774-1843)らロマン派の詩人たちの子供観は、子供は生来、無垢で、神聖なものであるというものであった。この考え方は、ルソーから発展したもので、キリスト教の長い伝統的な考え方である原罪観に真っ向から対立するものであった。「子供は大人の父である」(“A child is father of man.”)というロマン主義者の革命的孩子観は、「地上の権威ある神」を信じる福音主義者の信念に対する挑戦であった。

ワーズワースの言う言葉「子供は大人の父である」とは、人間にとって最も根源的な価値経験は、幼少の時期に清純で無垢な童心によって体験されるのであり、したがって、大人は、人間にとって最も貴重な原初的な体験者の子供に対して「敬愛」(piety)を捧げていかなければならない、という意味である。<sup>6)</sup>すなわち、この言葉は、子供は清純で無垢な童心を持っていて俗世間にまみれていないがゆえに良き感性を持っていて、大人より神に近いという意味を含んでいると言えよう。

*Great Expectations* において、ピップが世俗的価値を受け入れるようになるのは、彼が知識(階級や金についての知識)を持つことによってである。彼の姉は、ピップが監獄船(hulk)についてしつこく尋ねる時、「人間は、人殺しをしたり、盗みをしたり、にせものをつくったり、いろんな悪いことをするから、監獄船に入れられるんだよ。そういう人間は、いつでもものを聞きたがるのがもとになるんです」<sup>7)</sup>と言う。ピップの姉の言葉は、ピッ

プの人生において暗示的意味を持つ。ピップの世俗的価値(階級や金の価値)を知ることと、作品において監獄船から脱走したマグウィッチ(Magwitch)とが密接に結びついているからである。作品の最初、ピップは監獄船から脱出したマグウィッチにやすりと食べ物を持って行くことにより、マグウィッチを助ける。マグウィッチは、その後、逮捕されオーストラリアに流刑の身となるのだが、かつて自分を助けてくれた子供に恩返しをしようと、巨額の金を送り続ける。ピップは、紳士階級の仲間入りをするが、管財人の弁護士ジャガーズ(Jaggers)からその金を渡される時、事情を説明してもらえなかったため、老資産家のミス・ハヴィシャム(Miss Havisham)が後見人であると早合点する。彼の早合点の原因は、サティスハウス(Satis House)に出入りすることにより、彼が金と階級を結びつけて考えるようになったためである。ピップの早合点は、ロンドンへ行くまでの彼を取り巻く環境を考慮すると当然のことと言えよう。鍛冶場での修行を嫌い、自分の家を恥じていたピップは、ジャガーズが、「私は、この若者に彼が立派な財産をそっくり譲り受けることになるだろうということを伝えるように言いつかっておるのです。それから、もう一つ、彼がすぐさまこの生活環境とこの土地を離れて紳士として教育される一つまり、大身代を相続する若者として教育されることを、その財産の現所有者は希望しているということです」(130)と言ったとき、夢が実現したと思い、ミス・ハヴィシャムが自身をすばらしい大金持にしようとしていると感じる。そしてピップは、ジョーが年季証書を取り出して、火に投げ込んだとき、自由になったと感じる。ディケンズは、年季証書がなくなった日の夕食後沼地に行ったピップの心境を次のように描写している。

**No more low wet grounds, no more dykes and sluices, no more of these grazing cattle—though they seemed, in their dull manner, to wear a more respectful air now, and to face round, in order that they might stare as long as possible at the possessor of such great expectations—farewell, monotonous acquaintances of my childhood, henceforth I was for London and greatness: not for smith's work in general and for you! I made my exultant way to the old Battery, and, lying down there to consider the question whether Miss Havisham intended me for Estella, fell sleep. (139-40)**

この引用からピップが鍛冶場とその周辺とロンドンとは全く別の異質な世界であると考えていることが解るが、ピップのそれまでの環境に関して、鍛冶場と異質な世界と考えられるのはサティスハウスしかなく、屋敷の住人であるミス・ハヴィシャムが後見人であると思いついても、彼にとっては不自然なことではないのだ。後に事実を知るまで、ピップにとって、自分の後見人がかつて助けた囚人だとは思ってもよらないことだったのだ。

ピップが金と階級を結びつけて考え、故郷を去ることは、旧約聖書「創世記」において、アダムとエバがエデンの国の中央にある善悪を知る木から木の実をとり、神により追放さ

れる過程にたとえられよう。*Great Expectations*において、鍛冶屋とその周辺、すなわち、テムズ川下流にある沼沢地帯は、<sup>8)</sup>ピップにとってかならずしも快適とは言えないが、彼に愛情を注いでくれるジョーやビディー(Biddy)がいるがゆえに彼にとって楽園とも言っている場所である。彼がこの楽園と言ってもいい故郷を去る心因の一つとなったのが、サティスハウスとその住人であるエステラ(Estella)とミス・ハヴィシヤムである。特にエステラは、労働者の子供としてさげすんだように接するがゆえに、ピップに彼女への憧れを持たせ、高慢であるがゆえに、彼の人生の中心的動機となり、彼のジェントルマンになりたいという願望をますますかきたてる。階級的隔たりをピップに最初を感じさせるのもエステラであるし、自分の世界の向こう側の世界への願望を持たせるのもエステラである。ゴム(A. H. Gomme)が指摘しているように、エステラが原因でピップは、彼を本当に愛している人たちを見捨てたり軽蔑したりするようになる。<sup>9)</sup>

ピップは、自分つまらない労働者の子供であり、手がざらざらして、靴が厚いどた靴であることに劣等感を覚えるが、原因は、エステラの彼に対する態度にある。例えば、エステラの階級意識は、エステラがピップに食事を与えるときの態度に表れている。

**She came back, with some bread and meat and a little mug of beer. She put the mug down on the stones of the yard, and gave me the bread and meat without looking at me, as insolently as if I were a dog in disgrace. I was so humiliated, hurt, spurned, angry, sorry—I cannot hit upon the right name for the smart—God knows what its name was—that tears started to my eyes. (57)**

このように、不当に扱われることによって、階級意識を植えつけられたピップは、教育のないジョーのことを恥ずかしく思い、将来鍛冶屋になることを運命づけられていたとしても、ジョーの職業をとて好きになれそうもないという確信を持つに至る。ドロシー・ヴァン・гент(Dorothy Van Ghent)は、ピップの罪がジョーに対する紳士気取りの罪であり、紳士気取りの罪とは、他者の人間としての価値を否定することである、と述べる<sup>10)</sup>。しかし、作品の後半で、ピップはジョーの人間としての価値を認識するに至る。楽園を喪失したピップに救いを与えるのは、ジョーによる赦しのみと言ってもいい。ジャン・レイモン(Jean Raimond)は、*Great Expectations*において、文明の価値、特に金の価値が、キリスト教的なものと同相争うと述べるが<sup>11)</sup>、ピップ個人の心の中でもこの二つが絶えず争っていて彼を迷わせる。彼がジョーの価値を知るのは、遺産相続の希望がすっかり消え去り、病気になるまで彼の看護を受けるときである。ジョーは、昔のようにピップに語りかけ、友情がずっと変わらないことを彼に確信させる。紳士になる願望のため自身を裏切り、かつて心の中で自身を拒否したピップに対するジョー・ガージャリによる罪の赦しは、ピップの心を真に癒すものであり、キリストの説いた愛に基づく行為である。また、金によってのみ紳士になれるのか、倫理的側面からも紳士と言えなければ人間として正しくないのか、

作品のテーマに深く関わる行為でもある。そして、ジョーのこの行為こそが、ピップを罪の意識から解放する行為と言ってよかろう。

### 3. マグウィッチとピップの罪の意識

さて、ジョーにより赦されるまでピップはずっと罪の意識に縛られているが、ピップの縛られている罪の意識の「罪」とは、ジョーに対する紳士気取りの罪だけではない。それは、作品の最初にピップが食料品室からクリスマスのパイとブランデーを盗み出し、囚人であるマグウィッチにやすりとともに与え、彼が足枷から解放されるため手助けをしたことから生じた因果関係に基づく罪の意識でもあるのだ。

例えば、ピップは、沼沢地の囚人マグウィッチに持っていく一切れのパンをズボンの中に隠すが、ジョーの言葉でパンを丸のみしたと思った姉は、気つけ薬としてタール水を飲ますが、タール水を飲まされた後、ピップは彼自身が語るように、良心の呵責に襲われている。また、食料室で盗みをし、沼地へ出た後、ピップには、水も門も堤も土手も霧の中から、自分に向かって「他人のポーク・パイを盗んだ小僧だ。あいつをつかまえろ。」(14)と言っているように聞こえ、牛が「よう！泥棒小僧」(Holloa, young thief!)(14)と言っているように聞こえるが、このことは、ピップが罪の意識にとらわれていることを示している。さらに、ピップはブランデーをマグウィッチに持って行くとき、タール水の水差しの水をブランデーの壺に入れて、いっぱいにしておくと、そのブランデーをパンプルチュック(Pumblechuck)が飲んで狂ったようになってのを見て、彼を殺したような気持ちになる。

このように、マグウィッチを助けることによって罪の意識にとらわれてしまうピップだが、ピップの行為は、結果的に彼を鍛冶屋と労働者階級から解放することになる。ピップは、捕まえられたマグウィッチが、軍曹の指示により監視とっしよに船に乗り込むところを見るが、ここでピップの目に映る囚人と監獄船の描写に注目したい。

**No one seemed surprised to see him, or interested in seeing him, or glad to see him, or sorry to see him, or spoke a word, except that somebody in the boat growled as if to dogs, 'Give away, you!' which was the signal for the dip of the oars,. By the light of torches, we saw the black Hulk lying out a little way from the mud of the shore, like a wicked Noah's ark. Cribbed and barred and moored by massive rusty chains, the prison-ship seemed in my young eyes to be ironed like the prisoners. (36)**

ここで、監獄船が「邪悪なノアの箱舟」(a wicked Noah's ark)と表現されていることは、ピップの未来を考えた場合、注目に値する。なぜなら、監獄船に乗り込むマグウィッチにより鍛冶屋と労働者階級から解放されるにもかかわらず、ピップは、後にマグウィッチが

現れたとき、「わたしをあゝの鍛冶屋にそっとしておいてくれたらよかったのに」(306)と自らの境遇を嘆くことになるからである。すなわち、「邪悪なノアの箱舟」とはアイロニーを含んだ表現と言えよう。ジャガーズにより、自身が莫大な遺産相続の見込みを持っていると告げられたとき、ピップは、ミス・ハヴィシヤムを後見人と思いこむが、ピップの思いこみは、ピップの階級意識に基づくものである。すなわち、囚人が後見人であることは、常に階級を意識してきたピップにとって考え難いことなのであり、自分が出入りしていたサティス・ハウスのミス・ハヴィシヤムこそ後見人であると考えすることは、ピップにとってごく自然なことなのだ。

このような思い違いは、後にピップを幻滅させることになるが、オーストラリアに流刑になったマグウィッチにより、ピップの願望が実現するのは事実である。ジョゼフ・ウィーゼンファース(Joseph Wiesenfarth)は、*Great Expectations*がよく知られたディック・ウィッティントン(Dick Whittington)の話で表現された大衆の望む願望実現の夢を書き改めたものである、と指摘する<sup>12)</sup>。孤児であるディック・ウィッティントンは、料理人セシリー(Cecily)により酷使されるが、ネコによって幸運を得、金持ちの雇用主の娘と結婚し、ロンドン市長となる。このことからウィーゼンファースは、ウィッティントンの幸運は中産階級の夢の具体化であり、ピップの遺産相続の見込みの原型であると考え<sup>13)</sup>、ピップの望む願望実現の夢は、マグウィッチの夢でもあったのだ。

マグウィッチは、再逮捕された後流刑にされ、オーストラリアに移送される。オーストラリアは、18世紀後半に流刑植民地として制度化された。その用途は、主にイギリスから過剰に増加し更生の見込みのない不要な重罪人を受け入れることであった。イギリスから強制移送された犯罪者達は、イギリス本国へ帰ることは許されていなかったが、マグウィッチに対する帰国禁止命令は、それをやぶると死刑になる命令であると同時に、帝国主義的な命令でもある<sup>14)</sup>。この帝国主義的命令の背景には、イギリスにおける犯罪の増加とそれにとまなう刑罰の方法に関する議論があった。1770年代において、犯罪者は増加傾向にあり、監獄は債務者の増加により混乱状態にあった。1775年における流刑の中断が危機的状況を招いたので、政府は一時的な監禁場所として1776年、老朽船の使用という解決法を見出した。この老朽船は、後に牢獄船(hulks)と呼ばれるようになる。囚人たちは、牢獄船において監獄より厳しい扱いを受けた。彼らは、制限された規定食を課せられ、重労働であるテムズ川や港市の清掃作業に駆り立てられた。犯罪に満ちあふれていたイギリスでは、一時的に絞首刑が用いられたが、1783年頃には、世論は流刑へと傾いた。その結果、1787年に最初の船がオーストラリアに向けて出港したのであった<sup>15)</sup>。

帰国禁止命令に逆らいピップに会いにきたマグウィッチは、ニューサウスウェールズ(New South Wales)で牧羊者となったことを言い、「わしがお前を紳士にしたんだ」(304)と言って、自身がピップの遺産の源であることを明らかにする。ピップの部屋を見回し、紳士となったピップを見たマグウィッチは、「わしはおまえの2番目の父親だ。」(I'm your second father.)(304)と言うが、ピップは口がきけなくなり、またマグウィッチがイギリス

で見つかれば絞首刑になると知り、困惑してしまう。マグウィッチの話を聞いて呆然としたピップは、考える力がよみがえったとき、はじめて自分がいかに惨めであるか、また「自分が乗っていた船」(307)がいかに粉みじんに砕けさったかということをはっきり認識し始めるが、ここでディケンズがピップの運命を船にたとえていることに注目したい。作品前半のピップがマグウィッチを助けたことによる因果関係を考えると、ピップの乗っていた船は、先に述べた「邪悪なノアの箱舟」であったと言えるのである。

ピップの罪の意識は、マグウィッチを助けたことにより自身が犯罪者マグウィッチと結びついてしまったという因果関係に基づく罪の意識であるが、作品においてディケンズは、ピップの心の中の道徳・宗教上の罪の意識を大きくとり上げている。その罪の意識とは、自身が紳士への夢のためジョーやビディを裏切ったという意識である。ビディからのジョーのバーナード・イン訪問に関する通知の手紙を読んだ後、ピップは「もし金で彼を遠ざけておくことができるならば、わたしはきっと金を出したことだろう」(206)と自身の心の内を吐露するが、ピップは自分がかつてエステラとの間に感じた階級意識を、今度は逆の立場でジョーとの間に感じる。

ピップのジョーを拒絶する気持ちは、*Little Dorrit* (1857)でウィリアム・ドリット(William Dorrit)がマードル(Merdle)家のお別れ晩餐会の後ジョン・チヴァリー(John Chivery)が彼を訪問した時感じる拒絶の気持ちと似ている<sup>16)</sup>。上流階級の仲間入りをしたウィリアム・ドリットは、「よくもずうずうしくここへやって来れたものだな。よくもわしに恥をかかせてくれたな」<sup>17)</sup>と怒りをあらわにするが、彼は明らかに階級意識をジョン・チヴァリーとの間に感じている。ウィリアム・ドリットは、マーシャルシーの過去の思い出を自身の中から消し去りたいという気持ちからジョン・チヴァリーを拒絶するが、ピップもまた過去の思い出が紳士の仲間入りをしたとたん足手まといとなり、ジョーを心の中で拒絶する。

しかし、囚人が自身の後見人だと知ったピップは、次の引用に見られるように裏切りの罪を痛切に感じる。

**I would not have gone back to Joe now, I would not have gone back to Biddy now, for any consideration: simply, I suppose, because my sense of my own worthless conduct to them was greater than every consideration. No wisdom on earth could have given me the comfort that I should have derived from their simplicity and fidelity; but I could never, never, never, undo what I had done.**  
(308)

ピップは、ジョーだけでなくビディとの間にも距離を感じるが、彼の感じる距離は、階級における距離だけでなく、徳性における距離でもある。ピップとマグウィッチの因果関係は、作品の後半にも見られる。ピップは、囚人が足枷から自由になるため使うやすりを

盗み、それは沼沢地で見つけられ、そのやすりでオーリック(**Orlick**)はミセス・ジョーを攻撃するからである。ピップは、姉が彼に対して気まぐれで、暴力的な威圧を加えては非道な仕打ちをしていたのを知っていたが、オーリックがピップの生霊(**double**)となっていて、ピップが認識できない願望を無意識に行動に表すことにおいてピップの生き写しを表しているならば、ピップは象徴的に殺人の罪を犯したことになる。水門小屋の上の屋根裏部屋へ上るための梯子に縛りつけられたピップは、窮地に立ち、心からへりくだり、神の赦しを乞うが、窮地においてピップの心に浮かぶ人物に注目したい。その人物とは、エステラでもミス・ハヴィンシャムでもマグウィッチでもなく、ジョーとビディとハーバート(**Herbert**)なのである。ハーバートについては、ウィーゼンファースが指摘しているように<sup>18)</sup>、ピップの誠実な友人であるという点でジョーとよく似ているが、ビディもまた自然体のピップを受け入れてくれるという点でジョーとよく似ていると言えよう。また、バート・G・ホーンバック(**Bert G. Hornback**)が指摘しているように<sup>19)</sup>、皮肉な意味で、ハーバートの方がピップよりもジェントルマンに近い人物であり、また、ジョーの方がピップよりも人間としていい人間である。ハーバートに関しては、彼はピップがマグウィッチの出現により苦境に陥ったとしても、ずっとピップの忠実な友人である。彼の態度は、父親の持論、すなわち、「心根の立派な紳士でない男が、態度の立派な真の紳士になったためしは、この世が始まって以来いまだかつてない」(171)という持論を反映している。一方、ジョーに関しては、彼をかつてうとましく思い心の中でかつて拒絶したピップと比較すると、ジェントルマンとしての教育は受けていないけれども、ピップが苦境に陥ったとき彼を助けるので、ピップの忠実な友人であり、利己的でなく、人のことを常に考えている人物であると言える。二人ともピップにとっては、得難い友人であるが、回顧的物語において、特にピップの意識に重く存在し続ける人物は、ハーバートよりも故郷にいるピップとビディだと言っていだろう。

ピップのジョーとビディに対する気持ちは、水門小屋の上の屋根裏部屋へ上るための梯子に縛りつけられる前にすでにディケンズによって暗示されている。ピップは、遺産相続の見込みに慣れてしまっても、遺産相続の見込みが自分と周囲の人間に与える影響に気づいているし、彼自身の性格に与えた影響についても無意識的に気づいている。ピップは、ジョーに対する自身の振る舞いに関して絶えず不安な気持ちになっているし、ビディに対しても良心に恥じる気持ちを持っている。夜、ふと目をさましたとき、ピップは成人してなつかしい鍛冶屋でジョーの相棒になって働くことに満足していたら、もっと幸福でよかつたらと考える。

このようなピップの気持ちは、彼が窮地に立った時頂点に達するが、作品の構成においてピップを罪の意識から救い出すという点から考えると、ジョーはピップにとって最も重要な人物と考えられるのである。

#### 4. ジョーによる罪の赦し

ピップを乗せていた「邪悪なノアの箱舟」はマグウィッチの出現により粉みじんに砕けさるが、ディケンズは、運命を表す船の行き先を示す。ピップは、マグウィッチをボートに乗せ彼の逃亡を手助けするが、その逃亡は、最終的に失敗に終わる。マグウィッチは投獄され、死刑となり、ピップは高熱を出し、寝込んでしまう。ピップが病気の間、看病し、彼の借財を代わりに払ったのは、ジョーであった。このようなジョーをピップは、「やさしいキリスト教徒」(**'gentle Christian man'**)(439)と表現するが、この表現は、単にジョーがキリスト信者であることを意味する表現ではない。作品においてこの表現は、彼がイエス・キリストの教えを実践する人物であることを意味する。

ロバート・ニューサム(**Robert Newsom**)は、ディケンズの信仰がユニテリアン派の見解を表すものと考えられると指摘するだけでなく、<sup>20)</sup>ディケンズが強調しているものは、磔刑とあがないによる人類の救済者よりも、むしろ、善の模範、教え導く人、癒す人、すなわち、悩み苦しんでいる人を慰める人としてのキリスト像に近いと述べる。<sup>21)</sup>ディケンズの死後、娘のメアリー(**Mary**)は、*The Life of Our Lord (1934)*を公にしたが、これは、ディケンズが自身の子供に読み聞かせるため、簡単な言葉で書いたイエス伝である。ディケンズは、*The Life of Our Lord*の最初で「イエスほどりっぱで、親切でやさしく、誰でも罪を犯した人や何か病気や不幸になっている人を可哀そうに思った人はほかにいなかった」と書いている。<sup>22)</sup>

罪を犯した人に対するイエスの姿勢は、新約聖書マルコによる福音書第2章第17節「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」に明確に見てとれるが、イエスの赦しと寛容の精神は、パリサイ派の律法学者から見て新しいものであったのである。イエスは、「新しいぶどう酒は新しい革袋に入れるべきである」(**new wine must be put into new bottles**)(**Mark 2 : 22**)と言っているが、新約聖書は、福音を信じるなら悔い改めが必要であるとしている。悔い改めによって古い革袋を新しい革袋に変えなければならないのである。人間というものは、しばしば自己中心的になり、この世の欲望により自分の人生を支配される。ピップもまた紳士階級と金銭への欲望により、自己自身の人生を支配されるが、ジョーは自分を裏切り、階級の違いにより拒絶したピップを赦す。

かつてピップを取り巻く環境は、コンピソン(**Compeyson**)への恨みに満ち溢れていた。盗んだ札を使ったという嫌疑で裁判されたとき、マグウィッチは、不平等な扱いを受ける。マグウィッチとコンピソンの人物証明によりマグウィッチは不利になり、コンピソンが7年の刑を受ける一方でマグウィッチは14年の刑を受ける。2人が脱走したときもコンピソンの処罰が軽くすむ一方、マグウィッチは、育ちの違いによって生涯の追放に処せられる。このような不平等な扱いを受けた結果、マグウィッチはコンピソンに恨みを持ち続けるだけでなく、コンプレックスを持ち、ピップを紳士にすることでコンプレックスを解消しようとする。

一方、ミス・ハヴィシャムは、エステラを美しいだけでなく、冷酷で残酷な女性に育て上げて、自身の愛をもて遊んだコンピソンによってもたらされた苦しみに対して、全男性に復讐させようとする。ピップは、コンピソンに復讐心を持ったマグウィッチとミス・ハヴィシャムの犠牲者と言えるが、ジョーが自分を裏切ったピップを赦すことにより、読者は、作品における罪が全て消え去ったかのような印象を受ける。その罪とは、ピップの紳士になるという願望と結びついている罪である。流刑に処せられたにもかかわらず、イギリスにまい戻ったマグウィッチは死刑の宣告を受けるが、彼の犯した罪は、法律上の「罪」(crime)だけでなく、コンピソンに対する復讐心を持ち続けピップを犠牲者にしたという道徳的・倫理的な「罪」(sin)でもある。ミス・ハヴィシャムもまた、復讐心を持ち続け、エステラにより全男性に復讐しようとするがゆえに、道徳・倫理上の罪を犯したと言えるのだ。マグウィッチとミス・ハヴィシャムの二人が自分たちの過去に受けた心の痛手から逃れるすべは、コンピソンを赦すこと以外になかったのだ。かつて自身を心の中で拒絶したピップに対し復讐心など一切もたず、常に愛情をもって接するジョーは、マグウィッチとミス・ハヴィシャムがかつてできなかった赦しを実行しているといえ、復讐の連鎖を断ち切るがゆえにプロットの上で重要な役割を果たしている。

しかし、ジョーは、ディケンズが作品の紛糾したプロットに結論めいたものを示すためにだけに用いた人物ではないと考えられる。それは、ジョーの美德に関するディケンズの一貫した描写で明らかである。

ジョーは、恐妻家の夫であり、無学な人物であるが、ブライアン・マレー(Brian Murray)が指摘しているように、<sup>23)</sup>ピップは、「紳士」には珍しい生得の善良さと威厳がジョーにあることをよく認識するようになる。鍛冶場でジョーの見習いになるまで、ピップは、村で臨時の仕事をしたり、学習の初歩、すなわち、イロハや9つの数字などを身につけ始める。石版の上にピップがでこぼこの文字で手紙を書くという試みは、ジョーを驚かせる。「ねえ、ピップ、お前はなんてすばらしい学者なんだ！ほんとうに！」(41)とジョーは、青い目を見張って言う。アラン・グラント(Allan Grant)が指摘しているように、<sup>24)</sup>鍛冶屋であるジョーにとって、学問とは全く自分とは関係のないものであり、称賛ものなのである。それは、次のようなジョーの言葉により明らかである。

**‘Give me,’ said Joe, ‘a good book, or a good newspaper, and sit me down afore a good fire, and I ask no better. Lord!’ he continued, after rubbing his knees a little, ‘when you do come to a J and a O, and says you, “Here, at last, is a J-O, Joe,” how interesting reading is!’ (41)**

ピップは、ジョーの言葉から、「ジョーの教育が蒸気機関と同じで、まだきわめて幼稚なものである」(41)と確信する。ジョーは、自身の姓の「ガージャリ」さえ書けないほど無学であるが、自分を取り巻く環境が勉強できる環境でなかったとピップに説明する。ジョー

の父親は、酒飲みで酒に酔っぱらうと、母親やジョーに暴力をふるう人物で、二人が逃げ出して、母親の助力でジョーが学校へ行くことになると、二人のいる家の前で騒ぎをおこし、ジョーの勉強を中断させてしまう。ジョーは、このような父親を恨むこともなく、彼がてんかんをおこして死ぬまで、彼を養う。

ジョーは、姉に対しても父親に対して見せるのと同じような忍耐力を見せる。ピップに自身に勉強を教えてくれるときは、ミセス・ジョーにあまり見せないようにし、こっそりかくれてやらなくてはならないと言うジョーは、その理由をミセス・ジョーがピップや自分を支配しては気がすまないからであると説明する。また、母親が奴隷のようにあくせく働いて苦勞し、一生の間、一日として心のやすまる日がなかったことを思い出し、ジョーは、自分が困っても構わないが、ミセス・ジョーがそのような目に会っては困ると考えている。ジョーの考えを知ったピップは、その後自身が心の中でジョーを仰ぎ見ているという、新しい感じを覚えるようになる。ジョーの美德は、彼が「人間相互間の愛<sup>25)</sup>」を大切にし、自らの気持ちを行為に移しているところに見られる。

ジョーの美德を考慮すると、ジョーはディケンズの考えるキリスト像に近い人物と言っていいだろう。第5章で、沼沢地で追跡されたマグウィッチは、捕らえられ、パイを盗んだと認める。この日、ジョーの家ではクリスマス・ディナーが行われていたが、ジョーの対応はクリスマスにふさわしいものである。ジョーは、囚人に対し、「わたしたちや、あんたが何をなされたか存じませんが、そのためあなたが餓死にした方がいいなんて思いはしませんでしたらう。まことに気の毒なかわいそうな方です、なあピップ。」(36)と言うが、彼の言葉は、クリスマスのテーマを暗示するだけでなく、彼が隣人愛の持ち主であることを示す言葉でもある。

イエスは、新約聖書ルカによる福音書第10章第25—37節において、良きサマリア人のたとえ話によって隣人愛について説明している。エルサレムからエリコへ行く途中、追いはぎに襲われたユダヤ人は、互いに憎しみ合っていたサマリア人に助けられる。サマリア人の行為は、相手がユダヤ人であったにもかかわらず、相手を真にあわれに思った行為であった。ジョーの自分の家のパイを食べ、将来ピップを裏切らせる原因を作ったマグウィッチに対する行為もまた、隣人愛に基づく行為と言っていいだろう。

さらに、自分を裏切ったピップを赦すジョーの行為は、イエスの説く愛に基づく行為と言える。ピップが自分の恩人について言おうとする時、ジョーは、「おれたちや、いつだって、いちばんいいともだちなんだね、そうだろう、ピップ」(44)と言う。このようなジョーに対し、ピップは、自分が友に対して、不誠実であったと感じ罪悪感を持つ。ピップは、最後に、ジョーに将来生まれる子に「ぼくが恩知らずだったとは言わないでくれ」(45)と言い、ビディに「ぼくが卑劣で不当だったとは言わないでくれ」(45)と言うが、このときもジョーは、「その子にそんなことは、一言もいわないよ」(45)と言い、彼を完全に赦す。

*Great Expectations* は、ヒーローによって一人称で語られるが、二つの視点—すなわち、語り手ピップと全知者たるディケンズの視点により、読者は絶えずヒーローであるピップ

の時間の経過にともなう感情に共感させられたり、倫理的・道徳的観点からピップを考えさせられたりする。ジャン・レイモンの述べるように、<sup>26)</sup>ピップの旅は、自我の探求と一つになっており、それは、失われた自己の再獲得の旅でもあると言えるが、読者は絶えずこの二つの視点からピップを考えさせられるので、ピップが彼を取り巻く環境や他者の影響により紳士になることや金を持つことの価値を知ることが当然だと感じる一方で、倫理的・道徳的観点から彼が欠点を持っていて、友人ジョーに対して不誠実であることを感じる。しかし、作品の最後でピップがジョーに赦しを乞う時、この二つの視点は、一つだけの視点となる。すなわち、全知者たるディケンズの視点からのみ読者はピップをながめることとなる。ピップが赦しを乞いジョーが「もしわしがおまえを赦すなんてことがあるとしたら、わしがおまえを赦すことは、神様をご存じだよ」(455)と言うとき、読者は、「ジョー・ガージャリによる赦しの物語」を強く感じとることとなる。ジョーの赦しは、*Great Expectations* において、ピップの救済手段だけでなく、ディケンズの思想を読者に伝える意味を持つのだ。

ディケンズは、*The Life of Our Lord* の第5章において、罪深いマグダラのマリアを近づけているイエスに対し疑念を抱くシモン(Simon)に罪の赦しの意味を説くイエスの姿を描いている。罪を赦す力があるイエスを印象づけ、マグダラのマリアがイエスの慈悲に感謝して去っていく場面を描いた後、ディケンズは次のように、自身の考えを述べている。

**We learn from this, that we must always forgive those who have done us any harm, when they come to us and say they are truly sorry for it. Even if they do not come and say so, we must still forgive them, and never hate them or be unkind to them, if we would hope that God will forgive us. (50-51)**

引用の「誰か私達に何か悪いことをしても、やってきてそれが本当に悪かったと言え、その人をいつでも赦してあげなければならない」という箇所は、普通の人間でもイエス・キリストが赦したごとく他者を赦すことが可能であるというディケンズの考えを示している部分である。ディケンズの赦しに関する考えは、*Great Expectations* において赦しを乞うピップとジョーの関係に明白に見てとれる。このように考えると、ディケンズはジョーのピップへの赦しを通して、イエス＝キリストによる罪の赦しと隣人愛の意味を読者に示したと言っているだろう。

## 注

**1 Paul Davis, *Dickens Companion*, p.193.**

ポール・デイヴィスは、2人の少年（デイヴィッドとピップ）双方とも瓶にラベルをはったり、鍛冶屋で働くとき、絶望的な感じに襲われることに注目し、鍛冶屋に靴墨工場の片鱗を感じとる。

**2 Paul Schlicke, “*Great Expectations*”, in *Oxford Reader’s Companion to Dickens*, p.255.**

**3 *Ibid.*, p.255.**

**4 Paul Davis, *op. cit.*, p.186.**

5 原罪（**original sin**）とは、アダムが神命に背いて犯した人類最初の罪（旧約創世記）である。人間は、皆アダムの子孫として生まれながらに原罪を負うものと考えられる。（原罪説）。

**6 松島正一、『イギリス・ロマン主義辞典』、pp.196-7.**

**7 Charles Dickens, *Great Expectations*, p.12.** 以下、引用文は同書により、引用末尾の（ ）にページを示す。日本語訳の部分は、山西英一訳『大いなる遺産』（新潮社）を参考にしたが、一部修正を施してある。

**8 鍛冶屋とその周辺は、ディケンズ自身が子供時代大半を過ごした田舎のケント(Kent)であると考えられている。**

**[*Oxford Reader’s Companion to Dickens*, p.252.]**

**9 A. H. Gomme, *Dickens*, p.181.**

**10 Dorothy Van Ghent, “*Great Expectations*”, in *Dickens: Modern Judgment.*, p.255.**

**11 ピエール・リーステイアス、ジャン・P・プチ、ジャン・レイモン、『十九世紀のイギリス小説』、小池滋・白田昭（訳）、p.198.**

**12 Joseph Wiesenfarth, *Gothic Manners and the Classic English Novel.* p.90.**

**13 *Ibid.*, p.90.**

**14 Edward W. Said, *Culture and Imperialism.* p.vii.**

**15 Randall MacGowen, “The Well-Ordered Prison: England, 1780-1865”, in *The Oxford History of the Prison*, p.76.**

**16** ジョー・ガージャリのバーナード・イン来訪は、ジョン・チヴァリーのウィリアム・ドリット訪問とよく似ている。ジョーは、晴れ着を着、帽子をかぶり、ピップを訪れ、ジョンは、晴れ着を着、山高帽を小脇に抱え、象牙の柄のついたステッキを握って現れるが、ピップにとってもウィリアム・ドリットにとっても、両者は忘れ去りたい過去と関連のある人物であるがゆえに、その外見にもかかわらず、彼らを拒絶してしまうのである。ピップは、ジョーの持つ帽子を「鳥の巣」のように思うが、ピップのノスタルジアが鳥の巣という幻影となって現れることは注目に値する。ピップは、故郷を自分の人生と切り離れた

い場所とを感じるが、作品において故郷は、ピップのパーソナリティーの一部を作った場所であるがゆえに、ピップとは切り離せない場所なのである。

17 Charles Dickens, *Little Dorrit*, p.632.

18 Joseph Wiesenfarth, *op.cit.*, p.99.

19 Bert G. Hornback, “*Noah’s Arkitecture*”: *A Study of Dickens’s Mythology*, p.129.

20 ユニテリアン派(Unitarians)は、三位一体説(Trinity)に反対し、唯一の神格を主張し、キリストの道徳的教えは受け入れるが、その神性は否定する宗派の人。ユニテリアン派教会は、イギリス国教会から脱して、1773年セオフィラス・リンゼイー(Theophilus Lindsay)によって作られた。

21 Robert Newsom, “Religion”, in *Oxford Reader’s Companion to Dickens*, p.492.

22 Charles Dickens, *The Life of Our Lord*, p.17. 以下、引用文は同書により、引用末尾の( )にページを示す。

23 Brian Murray, *Charles Dickens*, p.171.

24 Allan Grant, *A Preface to Dickens*, p.139.

25 Joseph Wiesenfarth, *op.cit.*, p.96.

26 『十九世紀のイギリスの小説』、p.204.

#### Works Cited

Davis, Paul. *Dickens Companion*. Harmondsworth: Penguin, 1999.

Dickens, Charles. *Great Expectations*. New York: Oxford UP, 1992.

———. *Little Dorrit*. New York: Oxford UP, 1991.

———. *The Life of Our Lord*. New York: Simon & Shuster, 1999.

Gomme, A.H.. *Dickens*. London: Evans Brother’s Ltd., 1971.

Ghent, Dorothy Van. *Great Expectations*, in *Dickens: Modern Judgment*. Ed. A.E. Dyson. London: Macmillan Co. & Ltd., 1968.

Grant, Allan. *A Preface to Dickens*. New York: Longman Group Ltd., 1984.

Hornback, Bert G. “*Noah’s Arkitecture*”: *A Study of Dickens’s Mythology*. Athens: Ohio UP, 1972.

MacGowen, Randall. “The Well-Ordered Prison: England, 1780-1865”, in *The Oxford History of the Prison*. Ed. Norval Morris, David J. Rothman. Oxford: Oxford UP, 1998.

Murray, Brian. *Charles Dickens*. New York: The Continuum Publishing Company, 1994.

Newsom, Robert. “Religion”, in *Oxford Reader’s Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. New York: Oxford UP, 1999.

Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. London: Chatto and Windus, 1993.

Schlicke, Paul. "Great Expectations", in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. New York: Oxford UP, 1999.

Wiesenfarth, Joseph. *Gothic Manners and the Classic English Novel*. London: University of Wisconsin Press, 1988.

松島正一、『イギリス・ロマン主義辞典』、北星堂、1995.

山西英一（訳）、『大いなる遺産』、新潮社、1990.

リーステイアス、ピエール、プチ、ジャン・P、レイモン、ジャン、『十九世紀のイギリス小説』、小池滋・白田昭（訳）、南雲堂、1986.